

Female Authorship and Ambition: Rereading Elizabeth Gaskell's *The Life of Charlotte Brontë*

Manami Tamura

Elizabeth Gaskell's *The Life of Charlotte Brontë* still maintains its unique quality though recent studies have revealed its concealment and distortion of the facts. Gaskell's intention when writing this biography was to show the authoress Charlotte Brontë as an admirable woman according to the standards of the period, and this required considerable embroidery of the facts on Gaskell's part. In an age when domestic duties were considered to have priority over other engagements for women, Gaskell tried to defend her fellow authoress. Thus, the work tells us as much about Elizabeth Gaskell as it does about Charlotte Brontë. This paper examines how Gaskell justified Charlotte's act of writing but covered up her ambition for success, and points out that it is not only Charlotte Brontë but female writers in general (including herself) that Gaskell intended to defend.

女性作家と野心——エリザベス・ギヤスケルの 『シャーロット・ブロンテの生涯』再読

田村 真奈美

1

Brontë 姉妹は伝記の題材となることがきわめて多い作家である。1994年に出版された *The Brontës* の序文で著者 Juliet Barker が「ここに再びブロンテの伝記を出すにあたって、弁明とはいわなくとも少なくとも説明は必要であろう」(Barker xvii) と述べているほどである。この数多あるブロンテ伝の原点が Elizabeth Gaskell の *The Life of Charlotte Brontë* (1857) である。近年の研究でこの伝記には不正確な記述や事実の隠蔽・歪曲がかなりあることがわかってきているが、それでもシャーロット本人を直接知る同時代の作家によって書かれたという点で、『シャーロット・ブロンテの生涯』はブロンテ伝のなかでもユニークな存在であり続けている。また、ギヤスケルの行った隠蔽や歪曲（あるいは脚色）の裏にある意図を探っていくと、伝記の対象となったシャーロット・ブロンテよりもむしろこの伝記を書いたギヤスケルの事情が明らかになってくる。そしてそこにはギヤスケル個人の問題のみならず、ヴィクトリア朝英国における女性作家全体に関わる問題も含まれているのである。本稿では伝記作家ギヤスケルの意図と手法を意識して『シャーロット・ブロンテの生涯』（以下『生涯』と略す）を読み直し、特にそこから読み取れる女性作家と野心の問題について考えてみたい。

2

まず、ヴィクトリア朝期の英国で女性作家がいかに問題含みの存在であったのか、という点から見てゆく。当時女性が作家になるということが一般にどのように考えられていたかを伝える格好の資料が『生涯』には引用されている。詩人 Robert Southey の手紙である。1836年20歳のシャーロット・ブロンテは著名な詩人であったサウジーに自作の詩を送り助言を求めたが、それに対するサウジーの返事には次のようなことばが含まれていた。

‘Literature cannot be the business of a woman’s life, and it ought not to be. The more she is engaged in her proper duties, the less leisure will she have for it, even as an accomplishment and a recreation.’ (123)

ここでの「女性本来の義務 (her proper duties)」とは女性が家庭内で妻、母、娘として果たすべき義務のことであり、それは作家としての仕事と両立できないというのである。逆に言えば、文学を職業としている女性は家庭内での義務を怠っているとみなされがちであった、ということになる。

一方、野心を抱くということもまた「女らしくない」とみなされていた。Carolyn Heilbrun は *Writing a Woman’s Life* (1988) のなかで、「女性の自伝において自らの成功を声高に主張したり、野心を認めたりすることができない状態は20世紀に入ってからも続いていた」(Heilbrun 24) として、野心を認めることは女性には許されない暗黙のタブーであったと述べている。

ギヤスケルがシャーロット・ブロンテの伝記を書くことになったのは、シャーロットの父 Patrick Brontë からの依頼による¹が、実はギヤスケル自身、依頼を受ける以前からシャーロットの伝記を書きたいという意向を持っていた。出版社社長 George Smith に宛てた手紙のなかで明らかにされるその執筆目的は、シャーロットを「作家としてだけでなく女性として世間の人々に尊敬させる」(*Letters* 345) ことであった。しばしばその作品が「女らしくない」とされる作家シャーロット・ブロンテを「女らしさ」の規範のうちに取り込んで描くことでその汚名をそそぎたい、とギヤスケルは考えていたのである。そのため、シャーロットが家庭内の義務に忠実な娘であることを強調する一方、野心の方は目立たないようにすることが必要であった。

3

先にあげたサウジーの手紙にシャーロット・ブロンテは次のような返事を書いた。ギヤスケルは「彼女の性格は次の手紙によく表れている」(124) とわざわざ前置きをつけて引用している。

‘Following my father’s advice...I have endeavoured not only attentively to observe all the duties a woman ought to fulfill, but to feel deeply interested in them. I don’t always succeed, for sometimes when I’m teaching or sewing I would rather be reading or writing; but I try to deny myself; and my father’s approbation amply rewarded me for the privation. I trust I shall never more feel ambitious to see my name in print....’ (125)

この手紙が示すシャーロット像は、従順で家庭内の義務を忠実に果たす「理想的」な娘というものであり、それを示すことがこの手紙を引用したギヤスケルの狙いでもあろう。

しかし現実にはシャーロットはその後作家になりたいと思いつけ、ついに *Jane Eyre* (1847) で一躍人気作家となったのだった。子どもころから絶えず物語を書いていたシャーロットを ‘rage for literary composition’ (66) に取り憑かれていたとギaskellは形容する。しかしその一方で、それとバランスを取るように家庭内での義務を果たすことも忘れてはいなかった、と次のように力説している。

To counterbalance this tendency in Charlotte, was the strong common sense natural to her, and daily called into exercise by the requirements of her practical life. Her duties were not merely to learn her lessons, to read a certain quantity, to gain certain ideas: she had, besides, to brush rooms, to run errands up and down stairs, to help in the simplest forms of cooking, to be by turns play-fellow and monitor to her young sisters and brother, to make and to mend, and to study economy under her careful aunt. (73)

掃除や料理の手伝いなど細々と実例を書き連ねることで、子どものうちから日々の生活上の務めを果たしながら書いていたシャーロットの姿をギaskellは読者に印象づける。そしてこのパターンはこの後も繰り返され、シャーロットの創作活動が言及されるときには決まってその前後に彼女が家庭の義務を黙々と果たす姿が描かれるのである。

1846年シャーロットは妹たちとともに詩集を出版することにする。この計画は家庭の話題が続く合間に断片的に描かれる。ようやく出版にこぎつけた詩集が結局は失敗に終わったことを告げた後、ギaskellはシャーロットが友人に宛てた1通の手紙を、‘the wholesome sense of duty’ (237) を伝えるものだという注釈つきで引用している。それは、家に留まり老いた親の面倒を見るべきか外に出てガヴァネスとして働くべきか、という友人の問いに対する返事で、シャーロットは家に留まり親の面倒を見るように、と友人に助言する。「私は今自分でもそうしようとしていることをあなたにも勧めているのよ」(238) ということば通り、シャーロットはこの時期、視力の衰えた父のそばにいることを優先して家に留まっていたのだった。

『ジェイン・エア』が書かれたのも、父の目の手術のことでシャーロットが奔走していたときであった。彼女は「すべての家事と娘としての義務を果たしてから、ようやく座って執筆する時間を確保」(245) できたのだった。シャーロットの作品のなかでもっとも有名で、またもっとも「女らしくない」とされた²『ジェイン・エア』だけに、その執筆場面でのギaskellのシャーロット擁護は熱を帯びる。

Think of her home ... ; think of her father's sight hanging on a thread; --of her sisters' delicate health, and dependence on her care; --and then admire as it deserves to be admired, the steady courage which could work away at 'Jane Eyre'.... (245)

『ジェイン・エア』執筆当時のシャーロットがおかれていた苦境を強調し、そのようななかで娘として、姉としての義務を果たしながら書かれたのだと述べることで、作品そのものはさておき³ 作者については女らしくないという非難はあたらない、とするのである。

『ジェイン・エア』の成功で作家として認められるようになってからのシャーロットの生活については、「作家 Currer Bell [シャーロットの筆名] としての生活と一女性シャーロット・ブロンテとしての生活という、2つの平行した流れに分かれた」とギヤスケルは説明する。そして「女性の義務と作家の義務は相反するものではないが異なるもので、両立するのは不可能ではないが難しい」(271) と続けるが、ここでのシャーロットの描写にはギヤスケルの姿が重なってくる。さらに、難しいからといって尻込みしてはならない、とギヤスケルは次のように主張する。

And yet she *must not* shrink from the extra responsibility implied by the very fact of her possessing such talents. She *must not* hide her gift in a napkin; it was meant for the use and service of others. In a humble and faithful spirit *must* she labour to do what is not impossible, or God would not have set her to do it. (272, italics mine)

この部分では‘must not’, ‘must not’, ‘must’ と強い口調で、女性が作家活動に携わることに関する語り手の信念が表明されている。書く才能を与えられている者はそれを他人のために役立てなければならない、というのはユニテリアン⁴であったギヤスケルの信条であった。そしてこれこそがサウジーの手紙に対するギヤスケルの返事でもある。女性作家は家庭での義務を怠っているわけではない。また、作家としての才能を与えられたということはそれを活かす義務を負っているということでもある。女性作家はその二つの義務を困難ではあっても両立させるべきだ、というギヤスケルは、もはや単にシャーロット・ブロンテを擁護しているだけではなく、自らを含む「女性作家」という存在を正当化しているのである。

こうしてみると、これまで見てきた家庭での義務を果たしながら創作活動をしていたシャーロット・ブロンテの描写もまた、単に彼女を擁護するためだけではないことがわかる。妻、母としての義務を果たしながら書いていたのはギヤスケル自身でもあった。シャーロットが執筆の合間にしていた家事の内容を詳しく記述したのも、同じように細々とした家庭内の仕事をこなしながら書き続けた女性作家として、二つの義務の両立の難しさとそれに組み続ける姿を強調したかったのであろう⁵。

4

次に女性作家における野心の問題であるが、シャーロット・ブロンテに関する限り、彼女が成功への野心を抱いていたことは明らかだと言ってよいだろう。『生涯』にも引用されている次の手紙でシャーロットは自らの野心をあっさり認めている。ブリュッセルへの留学を計画した彼女が、

伯母に経済的支援を依頼した手紙である。

‘Papa will, perhaps, think it a wild and ambitious scheme; but who ever rose in the world without *ambition*? When he left Ireland to go to Cambridge University, he was as *ambitious* as I am now.’ (176, italics mine)

この手紙では、彼女が自らの野心を認めるだけでなく、父親の野心を持ち出して自らの野心を正当化していることにも注意する必要がある。野心は男性には許されても女性には許されない、という当時の社会通念をまったく無視しているからである。これが身内に宛てた手紙であるという事情も考慮すべきではあるが、先に引用したサウジーへの返信でも「二度と野心は抱かない (I shall never more feel ambitious)」と言ってそれまでは野心を抱いていたことを間接的に認めてしまっていることを合わせて考えても、シャーロット・ブロンテは女性の抱く野心がどのように見られていたかに疎かたつと考えられるだろう。

ギヤスケル自身は『生涯』のなかでシャーロットについて「野心 (ambition)」ということばを一度も用いてはいない。しかしながら「シャーロット自身のことばを用いることができるころでは、他人のことばを代わりに用いるべきではない」(231) という信念に基づいて『生涯』は書かれたために、シャーロットの手紙も第三者のプライベートに関わる部分以外はほぼ全文が引用されていることが多く、ギヤスケルの意図にそぐわないシャーロットのことばが引用に含まれてしまうこともあるのである。しかし、シャーロットを作家としてだけでなく女性としても尊敬される存在として描きたいギヤスケルは、これから見てゆくように、シャーロットの野心を目立たないように注意深く抑えている。

先の、野心を認めた伯母宛の手紙で持ち出されるブリュッセルへの留学計画は、ブリュッセルを訪問した友人からの手紙がきっかけだった。その手紙を読んでどう感じたかをシャーロットは別の友人に書き送っている。その手紙が伯母宛の手紙の前に引用されているのだが、この手紙でシャーロットは自分も行きたいという羨望を打ち明けた後、妹の Anne の健康状態を心配する追伸を書き添えている。シャーロットもアンもこの時期は住み込みのガヴァネスとして働いており、家を離れていた。「私がいっしょにいてやれば……アンは私よりももっと孤独なのだから」

(165) ということばで終わるこの手紙の引用の後に、ギヤスケルは「彼女は自分のことなら多くを耐えることができた。しかし他の人間の悲しみを黙って見ていることは耐えられなかった。特にそれが妹の場合は」(165) と続け、シャーロットは妹たちの心身の健康を考えて、住み込みのガヴァネスとして働くのではなく姉妹とともに学校を運営することを思いついた、とする。しかし、それにはさらに知識を深めて教師としての資格を十分なものにすることが必要であるということで、シャーロットはブリュッセルへの留学を考えるようになった、というわけである。こうして貧しい牧師の娘が海外留学を考えるということ自体の大胆さを弱めたうえで、伯母への手紙は引用される。手紙に現れる「野心」ということばは変えようがないが、この熱意が何のためであったの

かということを明らかにすることで（その目的がたとえギヤスケルの脚色であっても）、シャーロットを野心家ではなく妹思いの姉に仕立てようとしたのである。

「野心」に関してギヤスケルが取った対策は、女性作家を正当化するときと同様、家庭での娘として、姉としての義務を果たそうとするシャーロットの姿の描写を挟み込むことだった。著名な詩人に作品を送って評価してもらおうという野心をシャーロットが抱いたときには、その野心をくじくような詩人からの返事に加えて、その詩人のことばを忠実に守り家庭での義務を果たすというシャーロットの決意の手紙を引用することで、従順なイメージを強調した。また、それでも諦められない彼女が詩集や小説の出版を企てたときも、それが父の病気や墮落した弟の酒浸りなどの苦難に満ちた日々のなかで、健気に義務を果たしながらその合間を縫って続けられたのだということで、シャーロットは苦境のなかで地道に努力しつづけた女性として描かれた。折に触れてギヤスケルは、シャーロットがいかに禁欲的であったか、自分の楽しみよりも義務を優先したか、と彼女の自己犠牲的な面に言及するが、それがもっとも強い印象を残すのが最終章である。ギヤスケルはこの伝記のまとめを、自分のことばではなく、シャーロットの友人 Mary Taylor から受け取った手紙のことばに託している。

‘She thought much of her duty, and had loftier and clearer notions of it than most people, and held fast to them with more success. It was done, it seems to me, with much more difficulty than people have of stronger nerves, and better fortunes. All her life was but labour and pain; and she never threw down the burden for the sake of present pleasure.’ (457)

このようにギヤスケルはシャーロットをよく知る友人の手紙を巧みに利用し、シャーロットの人生を自己犠牲の人生と結論づけてこの伝記を終えている。利己的な野心の対極にある自己犠牲が何よりもシャーロットの一生を特徴づけるものであったとすることで、シャーロットが実際には持っていた職業上の成功への野心を覆い隠しているのである。

さらに、作家とは神に与えられた才能を人のために活かす仕事、と主張していたことを今一度思い出したい。作家の活動そのものが自分のためのみならず他人のためであるのなら、才能のある者がその仕事に就くことはいわば「使命」ともいえる。こうしてギヤスケルは、作家になりたいと願うことは名声を求めるようなことではなく、「聖なる仕事」⁶をしたいと願うことなのだとして、作家になること自体をも野心から切り離そうとしているのである。ここでもギヤスケルが擁護しているのはもはやシャーロット・ブロンテだけではない。野心を抱くことが「女らしくない」とされる社会において作家になろうとした女性全体を擁護しているのである。

こうして書かれた『生涯』は大変な評判を呼んだ。作家 Charles Kingsley のように、「これまでシャーロット・ブロンテは‘coarseness’を好む作家とっていたが、『生涯』を読んで自分が思い違いをしていたことに気づいた」(Easson 398, also Allot 343) という読者もあり、シャーロットを「女らしさ」の規範のなかに取り戻すというギaskellの当初の目的は果たされたと言える。そして「作家としてだけでなく女性として世間の人々に尊敬させる」というギaskellの意図は、この伝記執筆を通じてシャーロット・ブロンテだけではなく、「女らしさ」という規範のなかで書かなければならなかった自らを含む同時代のすべての女性作家に向けられたものとなっていた。『生涯』の執筆を通じてギaskellは一女性作家を弁護したが、それは実際自らの作家活動の弁明でもあり、女性作家という存在そのものの正当化でもあったのである。

註

1. 1855年6月16日付けのパトリック・ブロンテからギaskell宛の手紙参照 (Green 232-3)。
2. 『ジェイン・エア』に対する酷評としてよく知られるのは1848年4月の *Christian Remembrancer* に載った匿名の記事と、1848年12月の *Quarterly Review* に載った匿名の記事。このうち前者は‘For a book more unfeminine...it would be hard to find in the annals of female authorship.’ (Allot 89) と、「女らしくない (unfeminine)」ということばを用いて『ジェイン・エア』を批判している。
3. シャーロット・ブロンテの作品にはところどころに「粗野なところ (coarseness)」がみられる、という批判にはギaskellも同意している。(426)
4. ユニテリアニズムは三位一体説を否定するキリスト教プロテスタントの一宗派。原罪を否定し、人類の進歩を信じたユニテリアンは、その進歩のために積極的に行動することを義務と考えた。ギaskellも自らの小説を通じて社会の諸問題に読者の目を向けさせることが社会をよりよいものにする、と考える点で典型的なユニテリアンであった。(小宮 38-41)
5. 『生涯』のなかでは他の女性作家についても「作家の義務」と「家庭の義務」を両立していることが記されている。1850年末、シャーロットは作家 Harriet Martineau の家を訪ねるが、‘The manner in which she combines the highest mental culture with the nicest discharge of feminine duties filled with me with admiration.’ (371) という感想を友人に書き送っている。
6. ギaskellは女性の仕事について「もし仕事の目的が自分ならば、そのような仕事は聖なるものとはいえないでしょう」と友人への手紙に書いている。(Letters 107)

参考文献

- Allot, Miriam, ed. *The Brontës: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1974.
 Barker, Juliet. *The Brontës*. London: Weidenfeld and Nicholson, 1994.
 Chapple, J. A. V. & Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs Gaskell*. Manchester: Manchester UP,

1966.

Chapple, John and Alan Shelston, eds. *The Further Letters of Mrs Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 2000.

Easson, Angus, ed. *Elizabeth Gaskell: The Critical Heritage*. London & NY: Routledge, 1991.

Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. 1857. Oxford: Oxford UP, 1996.

Green, Dudley, ed. *The Letters of the Reverend Patrick Brontë*. Stroud: Nunsuch Publishing Ltd., 2005.

Heilbrun, Carolyn G. *Writing a Woman's Life*. London: The Women's Press, 1988.

小宮彩加 「ヴィクトリア朝マンチェスターにおける文学の栄枯盛衰」『ヴィクトリア朝文化研究』第1号、2003年、38-48。